

情報としての「母子」の発見

本田和子

- 一 一つの前提
- 二 「妊娠・出産」を巡る啓蒙家の言説
- 三 母子の身体と産科医学
結びにかえて

論文要旨

身体の知恵であり、身体行為を回路として継承されてきた「子育て」が、文書の形を取り、情報として言説のレベルに浮上してきたのは、おおよそ江戸中期である。これら書物群は、その内容として、女性の身体、とりわけ「妊娠」と「出産」にかかわる諸注意を積極的に取り込んだことにより、従来の教訓書との間に一線を画したとされている。さらに、半世紀余の後、産科医学の興隆により、女性の生命現象に関して従来とは様相を異にする看過し得ぬ変化が訪れたと考えられる。

本稿は、この経緯に注目し、これらの現象を知の世界に生じた枠組みの変化と捕らえて、その意味を探ることを目的としている。

「妊娠・出産」のマニユアル化は、儒者や儒者系の医師らの手によって遂行された。結果として、「女訓書」と範疇化される書物群の輩出は、彼ら啓蒙家たちに指導的役割を委ね、活躍の場を提供することになる。しかし、啓蒙家た

ちの言説の特色は、その不徹底性にあり、「胎教論」を例に取るなら、その非合理性を指摘しつつも、諸種の禁忌事項にそれなりの場所が与えられていた。

産科医学の革新、とりわけ、賀川流の興隆は、妊娠と出産という優れて女性的な身体現象を、医師たちの支配下に置くことに成功している。しかも、それらが各流派間の理論闘争という形で言説空間内に位置を占めることにより、言説のレベルで正統性を保証されることが重要となってくる。結果として、女人の身体および胎児の生命も、言説上の事象として変化を余儀なくされた。出産に際して、母胎と胎児とのいずれが重視されるかも、直接の当事者の範疇を越えて、よりマクロなシステムに左右されるようになる。

「母」と「子」のいずれが優先されるべきだろうか。現在に連なるこうした問題も、母子がメディア事項と化したという、この時期の現象に端を発すると言い得よう。